

## 本科生の専攻科および短期大学教育についての自由 意見

吉本, 圭一  
九州大学教育学部助教授

<https://hdl.handle.net/2324/18881>

---

出版情報：短期大学における専攻科のあり方に関する調査研究, pp.79-85, 1997-03-01. 文部省委託調査  
短期大学専攻科のあり方に関する調査研究会

バージョン：

権利関係：

## 5. 本科生の専攻科および短大教育についての自由意見

### 1) 概要

本章では、本科生の専攻科および短大教育全般にかかわる自由記述意見を紹介する。こうした自記式調査票調査での自由回答の一般的傾向として、現状に満足し、制度を肯定的に評価する者は、特に意見を表明せず、大きな問題を感じている者や、また全般的には満足しつつも、部分的な改善を期待する者はそれを記入するという傾向がある。以下には、具体的な自由記入意見をそのまま載せているが、これが短大生全体の代表するかどうか、調査票の他の項目との関連で評価していただきたい。

たずねたのは、「短期大学や専攻科について、何かご意見などございましたら、ご自由にお書きください」という設問であり、回答欄は「短期大学について」および「専攻科について」と別々にしてある。

全般的な傾向を何点か指摘しておきたい。

まず、全般的な傾向として、自由回答への記入率は短期大学ごとに幅があったが、おおむね4分の1から3分の1程度であった。特に、本科生に対する「専攻科」への意見は、自由回答に記入した者の中でも半数弱であった。

すなわち、本科学生にとって、専攻科情報が不足しているということでもある。この情報の周知という問題は、具体的な意見の中でも多く見られた。2年生でも「関心はあるがよく分からない」という意見などが多くあった。もっと「説明会」や「専攻科の見学会」、「専攻科学生との交流会」を組織してほしいという意見などもあり、また、入学前の進学希望者まで含めて対外的な広報の不足を指摘した者もある。このことは単に進学の情報不足というだけでなく、修了後の就職などの可能性にも関わる専攻科の社会的認知度の問題である。もちろん、他方で「専攻科に入学することを前提として短大に入学した」のに選抜されるのはこまるなどの早くから専攻科情報を得た者もないではない。しかし、制度・組織が多様に運用されていることからすれば、基本的な情報の不足というのを解消していくことは重要な課題として、指摘できよう。

また、第2に教育のさまざまな面に対する「説明を求める」意見が多く見られた。とくに授業料とそれがどう教育に反映されているのかといった観点からの意見が多く見られた。これは本科・専攻科を問わず見られた。「コンシューマー主義」とも言われるように、教育コストへの保護者の意識がより敏感になっており、学生の意見もそれを反映したものとなっている。本科と専攻科のそれぞれの教育コストとその適切な教育内容への投入を説明していくことが求められている。施設、設備、その運用の時間的な工夫、教員の休講や授業改善の問題など、大学・短大全体に共通するものや、また個々の短期大学において解決すべき問題がそれぞれ指摘されている。

ともあれ、それぞれの自由記述意見の主な特徴を、若干の事例の紹介を通して検討してみよう。

### 2) 本科生の専攻科への見方について

#### ①仕組みが分からない・情報不足

基本的な制度の仕組みがを分かっていない、ぜひ教えてほしいという意見は多く、特に資格取得などについての疑問が多く指摘されているし、「1年で学位がとれる」などの誤

解も多く見られた。

情報の周知への要望は多数よせられており、次の様な意見はそのごく一部である。「もっと学生が認知できるよう、大学で何らかの配慮をしてほしい。専攻での学ぶ内容などがもっと学生などに知られば、関心も高まると思う」（経営学科、2年男子）、「学費がどれくらいかかるのか、単位数などくわしく知りたい。プリントなどで配ってほしい」（音楽学科、2年女子）、「専攻科は少し興味があるが、内容がどういうものか分からないので説明会や見学などできる機会を設けてほしい」（生活科学科食物、2年女子）。

また、学生本人たちの中では、よく認識しており、さらに専攻科進学を前提として短大に入学した者もある中で、社会的な認知度に言及した意見もあった。「専攻科の存在を知らない人、世の中にはたくさんいると思います。私たちのこの学科では保母という資格をとれるので、多くの人が進学します。やはり目的をもっていると意識や生活が違うと思う」（児童教育学科、2年女子）。このことは、進学前や修了者をうけいれる社会全体へのPRが不足しているということでもあろう。

### ②高い進学意欲と教育内容や資格についての肯定的評価

専攻科への関心は多くあり、それぞれの専門ごとにさまざまな期待が述べられているものが多くみられた。学習意欲・進学意欲の高い学生も見られる。「専攻科の存在は非常にうれしく思っている。専攻科はレベルの高い位置に存在しなければならないと考えている」（造形芸術学科、1年男子）。「現実に即した勉強がしたい。今後の望ましい方向をはっきり示してほしい。（福祉関係）介護のあり方など卒業生が現場でどのような仕事を受け持てるのか、良い方向へ改善させていく行動のしかたなども専門知識のほかに学びたい」（保育科、1年女子）。

教育内容についての肯定的な評価は多く記されていた。「海外に行ってファッションショーをするんですか？ 行ってみたいです」（服装学科、2年女子）。また1年制に関しては、「短大で学び足りない分を勉強する場所としてはいいと思う。しかし1年間では少し足りない気がする」（生活造形学科、2年女子）という意見もあった。

ただし、教育内容としての評価とともに、現実に進学してくる学生への次のようなコメントもある。「短大の忙しい2年間とはちがって、専攻科の2年間は技術をのぼすのに最適だと思う。ただ、私の学校の専攻科は、就職できない、したくないという人たちが多くいるので、ピアノなどに力が入っていない。どうすることもできないかもしれないけれど、少し悲しい」（音楽科、2年女子）。

### ③学位への期待と不安

2年制で学位授与機構認定の専攻科をもつ短大では、学士取得に関する期待はおおむね高い。「専攻科は短大の勉強の延長線上みたいにさらに深く学ぶことに共感です。4年制大学の卒業資格が得られるというのはとてもいき届いていると思います」（英語科、1年女子）。

他方、専攻科卒での学位の効用についての不安も、次のように指摘されている。「専攻科を卒業しても就職する時に、肩書きは〇〇短大専攻科卒になってしまう。4年行って学士をもらっても結局は短大卒の毛が生えた程度としか見てもらえない」（音楽科、2年女

子)。

#### ④専攻科の選抜と選抜時期

人気のある専攻科のばあい、選抜を実施している。昨今の就職難や就職活動の早期化とも連動して、入学者決定時期の問題に言及した意見もある。「希望した人がみんな入れるようにしてほしい。決定が11月頃というのは遅すぎる。入りたい人はやる気があるのだから、その時期に落とされるのはこまる」(児童教育学科、1年女子)。

その他にも、定員の枠や進学可能学科とできない学科があることの問題などを指摘する意見も多かった。「専攻科の定員をふやしてほしい」(商経科、1年男子)、「どの学科からも進学できるようにしてほしい」(保育科、2年女子)。

また、次のような意見、特に教育内容に関わる意見は、裏返せば、質的に高まらずに短大の延長にすぎないものとなっているといった否定的な評価ともちかいものである。「もっと入学できる枠(定員)を増やしてほしい。資格よりも内容を四大に近づけてほしい」(造形芸術学科、1年男子)。

#### ⑤教育内容の充実への強い要望

教育内容については、要望も大きい分だけ、本科生の目で見える範囲で実際の教育への否定的な意見もあった。

教育内容については、専攻分野による差異が大きいため一概にいけないが、若干の事例をあげると、内容の充実の目安としての資格取得についてのつぎのような意見もいくつか見られる。「英語で聖書を読むような授業をしないで、英語会話力を高めたり、英検1級程度の実力をつけられるような内容の授業をしてほしい」(英語科、1年女子)

また、基本的な短大本科+専攻科という教育課程の編成そのものにかかわる疑問も提起されている。「普通4年制だと2年と3年の時にわりと時間があまって創作できる時間があるけど、2年+2年だとそうゆうわけにもいかないと思う。実際今二回生だけど忙しい」(造形芸術学科、2年生女子)。

#### ⑥進学者の実態への否定的評価

ストレートな拒絶的な意見として次のような評価もいくつかあり、専攻科の充実を図るうえで大いに考えさせられる問題を含んでいる。「お金持ちのおじょうさんがいく所だと思う。そんなに勉強したって変わらないと思う」(生活文化学科、2年女子)。「何となく就職浪人している人が行く場所というイメージがあるので、行きづらいという人が多くいるのだと思う。そういうイメージを壊すことから始めれば、専攻科ももっと活性化すると思う」(家政科、1年女子)。

#### ⑦学士への途に関わる真剣な疑問

上の意見も含めて、本科生は、学士への途としての可能性や評価、またその効用について真剣な疑問・意見を持っている。否定的な評価となると、「学士の学位が確実にとれないし、授業も短大の先生なのでわかりにくそうだからいやだ」(電機情報工学科、2年男子)などがある。

次の意見は、本科が夜間の3年制であるための意見であるが、社会人への配慮という点では、学士に至る時間的な効率性は無視できない問題である。「昼間働いている者にとっては時間はとても貴重ですので、2年間(学士取得まで)になると難しいと思います」(初等教育科第2部、2年女子)。

#### ⑧専攻科修了の効用の不明さ

とくに、専攻科の修了後の就職などの社会的効用が不明であることが、進学へのブレーキとなっている。「卒業してもほとんど無意味」(生産システム工学系、1年男子)、「専攻科をでたから良いところに就職できるわけでも給料がいいわけでもなく、学士をとるのにもまた別の学校に行つて、大変です」(生活科学科、2年女子)など多数の意見があった。

次のような意見は、教育の外側にある就職や企業社会からの評価に言及しており、必ずしも個々の短期大学で改善しきれないものであるけれども、あるいは潜在的な需要層を逃してしまうことになっているのであろう。「もっと勉強したいので専攻科に進みたいが、逆に就職が不利になると聞いた。しかも、資格も取得できないし、勉強したいけれども専攻科はあきらめると思う。実に残念だ」(家政科、1年女子)。

### 3) 短期大学本科および全体についての意見

①短期大学教育における専門の充実、学習発展の多様な可能性への肯定的評価と中途半端さへの否定的評価

2年間という短期高等教育全般についての意見としては、肯定的な評価、否定的な評価それぞれにあった。まず高等教育における学習発展の多様な可能性への肯定的な評価として、「”学びたい”と思う人に対しては、道がひらけている所だと思いました」(服飾学科、2年女子)。「授業の容量に比べて、修学期間が短すぎるが、問題意識を喚起され、将来勉強してきたい課題に出会えることは良いことだと思う。授業料が高いので、内容が充実していることを望む」(保育科、1年女子)。

また、専門の充実という点で、「思っていたより、制作などの、特に専門科目が大変で、充実した毎日だった。多くのことを学べた」(造形芸術学科、2年女子)。さらに、「カリキュラムがとても充実しているので、もっと勉強してみたいと思う科目がより深く学べるので気に入っています。ただ、ちょっとユニークな授業があまりないような気がします」(英語科、1年女子)。

先の自己の発見に関連して、「自信」という点も重要であろう。「実習などとても大変ではあったけれど、自分が自信を持てるようになる2年間だったと思います」(初等教育科、2年女子)。

反面では、2年間のカリキュラムが過密であること、またその結果として消化不良で中途半端に終わっていることがあるなどの意見も多く見られた。「四年制で習うことをわずか半分の二年間で行うため、ゆっくりと自分の道は決めることはできず、まず頭の中に将来が見えてないと不安なため、自分も動くのは当然だが、学校側ももっと個人を見てほしい」(造形芸術学科、1年男子)。

4年制大学が併置されている学校での意見として、「別に不満なことではないが、四大

と短大とでは時間割の”空き”がちがすぎる」(初等教育科、1年男子)。この点は、選択科目を増やして、自由なカリキュラム選択をさせてほしいという、自由への要望も多くあげられており、これとも連動しているものとおもわれる。

中途半端さという点は専攻によっていろいろであろうが、2年制での学習の限界についての次のような意見もある。「私はランドスケープデザインを専攻しているからかもしれないが、2年間という期間では勉強しきれない。少し摘む程度しかできないと思う」(造形芸術学科、2年女子)。「短大の音楽学科は毎日授業がぎっしりつまっていて、ぜんぜん練習する時間がない。音大ではないので授業がつまっているのは仕方ないと思うけど、短大2年間ではあまり上手くなれないと思う。短大の音楽科はあまりに勉強するには短すぎるとおもう。やる気のない人と一緒に勉強したくない!!」(音楽学科、2年女子)。

## ②短大のアットホームな雰囲気と「ぬるま湯」への危惧

自然に恵まれた地方の短大では、規模的にもこじんまりと、アットホームな雰囲気に対する肯定的な評価とその分ぬるま湯になりがちな点は、つぎのようなかたちで多く述べられている。「先生方もとてもアットホームな感じであり、何でも相談しやすく勉強しやすい環境にある。自分もそうであるが、もう少し短大生は気を引き締めていかなければならないと思う。少し甘えていると思います」(初等教育科、2年男子)。

また、短大の学生の腰掛け的な雰囲気に対する疑問としても、多く指摘されている。「一般に短大というと高校卒業してまだ社会に属さず、遊んだり自由な時間が欲しいために就職までのワンクッションとしていくというイメージがある。自分は興味あることがあってそれを勉強したいために入ったが、そういう周囲のムードに流されて自分を見失うことがある」(造形芸術学科、1年女子)。

## ②費用面での疑問と説明をもとめる声

専攻科とはかぎらず、短期大学への意見という点では、むしろ学費問題などでシビアな意見が多かった。短大に限ったことではないが、低成長経済の中で教育費のアカウントビリティーが問われる時代になっている。短期大学本科についても、多くの自由記述意見が授業料の水準とそれがどのように教育に反映されているのか、学生が、そして保護者が敏感になっていることを示唆している。

「お金を取るわりには、設備が良くないので不愉快である。お金を何に使っているか、月に一度ペーパーを配布すべきである。2年間ではとてもハードスケジュールなのでつらい。時間割が適切に決められていないので生活のバランスがくずれる」(生活文化学科、2年女子)。

授業料だけでなく、教科書や実習の教材費などの費用についてもさまざまな意見があった。「授業であまり使わない教科書が高すぎる。そういう場合教科書を購入せずに、先生がプリントなどを作ってもらいたい」(家政学科、1年女子)。

芸術系では特に、他の分野以上に、実技の練習や制作のための教育施設・設備の充実と柔軟な運用を求める声大きい。「音楽の専門的なことを習得するために入学するのだから、レッスンの時間と回数を増やしてほしい。レッスン時間が45分で週1回というのは少ないです。各自の専攻楽器を2年間という短い間で学んでいくには、もっとレッスン時

間を増やして欲しいです。みんな同じことをおもっているはずです」(音楽学科、2年女子)。「学校が閉まる時間があまりにも早すぎて、思うようにやりたい事、やらなければならない事ができません。夜9時か10時くらいまで学校の施設を使わせてください」(造形芸術学科、1年女子)。

その他にも施設設備面では、「工芸の道具、作品等が多いので、2人にひとつのロッカーでは少しせまいです」(工芸美術科、1年女子)、「げた箱、ロッカーが学生数の割にせまい」(生活文化学科、2年女子)「実習中や長期休業中の寮費を説明してほしい」「授業料が高いのに、学校の設備(冷房など)が悪いと思う」(生活科学科、2年女子)などの多くの改善要望が、潜在的に授業料等の教育施設設備への適切さを求めたものといつてよいだろう。

また、附属の高校とキャンパスが一緒になっているいくつかの短期大学では、「高校と別にしてほしい。校舎をきれいにしてほしい」(家政学科、1年女子)や、「学食をきれいにして、高校と別にしてほしい。休憩する場所がほしい」(保育科、1年女子)というように、短大高校との差異化を図ってほしいという要望は、施設設備面および教育面で、さまざまに見られた。

大規模校については、「学科数や学生数が多いと学校全体のまとまりがないように感じられる。自分とは違う勉強を人とふれ合えるのは良いことかもしれないが逆に同じ目標を持った集団の中で生活していくのも良いと思う」(生活文化学科、1年女子)という意見もあった。

### ③教育の質への高い要望

短期大学が大学教育としての質を維持しているのかどうか、消費者としての学生の目は厳しいものが多くあった。「一方的な授業の形態を考え直してほしい。短大では難しいのかもしれないが、ゼミや実習などをさらに取り入れて学生に考えるための授業をしてくれれば私はとてもうれしい」(文学科、2年女子)。また、短大生がさまざまな大学生と交流しており、他の大学との比較での意見も見られた。「(自分の短大では) ”教室” で ”教科書” を見ながらの勉強が多いと思う。他大学の保育系に通う友達は演劇をしたり、子どもたちに勉強を教えてあげたりと様々だ。もうちょっと教室から飛び出すような勉強をしたい」(保育科、1年女子)。

また、教育内容が実社会で有効かどうかという点にも強い関心をもった意見があった。「もっと意味のある勉強がしたかった。授業、何をしているのか、何が教えたいのか、はっきりいって分からない。幼稚園で通用しなさすぎる授業が多い。この2年間何を勉強したのか(幼稚園の)先生に説明できない。エプロンシアターなどもやってみたかった(他学校の生徒の話を書きいて思ったこと)。もっと要領のいい授業をすべだ」(幼児教育学科、2年女子)。

クラス制度や出欠の重視、選択の少なさ、規則の多さ、さらには制服など、高校の延長と感じられるような教育体制に対しては、次のような否定的な意見が多く見られた。「出欠席ばかり重視されていてかんじんの中身が高校の延長程度では良くない」(文学科、2年女子)。

さらに、資格に関する関心は真剣であり、専攻科でも指摘した情報の不足に関わる抗議

の意見もいくつか見られた。「短大のパンフレットで、児童教育学科の案内のところで取得できる資格が書いてありますが、実際に取れるのと、専攻しなければとれない、あるいは児童教育学科では取得不可能とを、きちんと区別して書くか、説明を入れるべきだと思う。だまされました」（児童教育学科、2年女子）。

#### ④教員の授業への厳しい視線

また、個々の先生の教育への取り組みについても、さまざまの意見があった。「休講の場合、もっと早く正確に伝えてほしい。先生への評価を学生がやるべきだと思う。やる気のない、教科書を読むだけの先生は必要ない」（保育科、1年女子）。「授業中、タバコを吸ったり、授業を進めない先生を何とかしてほしい」（生活科学科、2年女子）や、休講などについての言及は多かった。さらに、教員が高齢すぎるという意見も、いくつか見られた。

#### ⑤就職や進学などの接続関係と短大の社会的地位

就職についての不安や指導への期待は多くある。地方地域の短大生の意見で、「就職の全国情報がほしい」（教養科、2年女子）、「短大卒は就職率が悪いと聞いたことがあるのでとても不安です」（音楽科、1年女子）。

また、大都市地域でも、大学の工学系や専門学校と競合する分野では、短大でのプログラミングなどの実習時間が少ないという別の学生の意見とも関係していると思われるが、「専門的なことを学べないので就職が厳しい」（電子情報工学科、2年男子）という意見も多く見られた。

また、進学面での指導や配慮を求める声は次第に大きくなりつつあるのではないか。「就職対策ばかりでなく、進学に関することも行ってほしい」（音楽科、2年女子）。また、4年制大学が併置され、編入制度があるばあいに次のような意見は実際には切実なものであろう。「4年制大学に編入する人たちのために単位調整などをしやすいようにしてほしい」（生活造形学科、1年女子）。

短大の教育の質が一定の社会的な評価を持っていることの重要性を認識する次の意見は、専攻科が必ずしも短大本科をカバーするものというよりも、本科は本科としての質の高さを訴える必要があることを示唆しているように思う。「本来、4年制大学の編入を志していたが、就職活動をしてみて、自分の学校の世間的地位を改めて感じた。ここ数年”短大離れ”といわれているが、4年間自堕落な学生生活を送るなら、2年間実のある有意義な経験をした方が本人のためなのではないだろうかと実感する今日この頃である」（教養学科、2年女子）。逆に、自分の進学した短大について「専門学校のほうがよかった」などという否定的な評価を持っている学生もあり、そうした意見が個々の学校においても必ずしも全体を代表するものとはいえないけれども、そうした意見を持っている場合に個々の学生に対するフォローも必要であるのかもしれない。